

# 仙林寺だより

NO. 69  
編集・発行  
松田正貴

## 行事報告

### 第三回ぼらももの里花まつり

二十九日、みどりの日改め昭和の日、花まつり稚児行列開催です。行列はやつぱり町の目抜き通りを外せません。今年の行程は中央公民館から仙林寺までの約一キロの距離を練り歩きました。沿道を埋め尽くす人波がコース選択の成否を示します。商工会青年部、あんちゃんズ(商工会青年部OB)



のパワーに引きずられ、JA伊達みらい、かみやさん、ボランティアの皆様の強力なバックアップに支えられました。勿論、行列の後押しは各寺院檀家の皆様や関係企業の協力金あつてのもの、只々頭が下がります。お蔭様でお稚児さんも七十七名(ぞろ目)で何と縁起が良い、御詠歌の方を合わせると百五十名を超える大行列でした。よいよ到着となれば仙林寺梅花講による「花まつり御和讃」の声も高らかに、また頭上からはライスシャワーならぬ八重桜の花びらシャワーや春色の紙ふぶき、参道は散華に彩られました。そして梵鐘の響きは、お釈迦様への灌仏や、稚児加持など仏教的



な行事へと導く梵音(ぼんのん) 清らかな仏の御声です。境内は散華と梵音で、すっかり荘厳された様子、(無数に散らばる切り紙のお掃除はお釈迦様から与えられた修行でしょうか・・・) 締めくくりは、来賓は

じめ関係者による灌仏法要、曹洞宗寺院での真言宗僧侶による法要です。拘りを離れた心を持つことが仏教の最も大切な教えと願われればむしろ自然な形ではないでしょうか。宗派を超えた仏教者の会「大法螺会」の歩みは同時に「ぼらももの里花まつり」の歩みでもあります。これからも仏様のお力をお借りして青少年の健全育成に心血を注いで参りたいと考えております。地域の皆様には子供たちの成長と共に大法螺会の歩みも暖かく見守って頂ければと思います。変わらぬご支援をお願い致します。合掌。

### 大立目薬師如来様祭礼

十五日、大立目薬師如来様祭礼です。

「花は七日(なぬか)の言葉通り、満開の桜の花も昨日の強風で半分ほどは散ってしまつたでしょうか。道元禅師様の言葉に「花の咲くるは春の風にもよおされ、花の散るは春の風にくまるとあります。冬の寒さに耐え忍んだ花の蕾を膨らませるのも春の風なら、その花を散らせるのもまた春の風です。私たち人間の目と言うものは、待ち望んだ桜の花は歓迎して愛でる、花が散った後の桜の木は、只々消毒が大変なだけの木というふうになり、好き嫌い、良し悪し、損得という拘りの目で見るのが常の

ようです。只、桜の花もいつまでも咲いている花であれば、今のよう国民的人気のある花ではなかつたでしょうし、また次の花を咲かせる為の木の体力を温存することもできないのかもしれない。今日の新聞を見ておりましたら、西暦二千年に生まれた赤ん坊は寿命が二百歳を超える、また二千年に五十七歳以下の人は百五十歳になる可能性が出てくるというような記事が載っております。『亀は万年』の小咄、「亀は万年生きると言うが、横丁のキン坊が飼つた亀が三日後に死んじまつたそうですよ!」それは、丁度その日が一万年目だつたんだよ。寿命というの、はたして長ければ良いのかというところに疑問を感じますし、「老老介護」と言われている時代、果たして誰が介護をしてくれるのか、不安が付きまといまふ。ところで、薬師如来様は、智慧を授ける仏の世界のお医者様です。「花は咲くばかり、そして花は散るばかり」そこに人のほからいを交えないことが仏様の智慧ということでしょう。人の命も自然の一部と考えれば同じことではないでしょうか。寿命とは、命を寿ぐと書くようです。また、天寿といえは寿ぐ事もまたお任せという事でしょう。寿げるだけの命を頂戴できればそれで良しとするのも仏様のものさしと言えそうです。

### 如意輪観音様祭礼

十七日、天気予報など何のその、前日から降り始めた雨を止ませたのは天帝の気分かはたまた観音様のご利益か。さて、先日新聞を読んでおりましたら、「故郷墓参りで窃盗男が自首」という記事を目にしました。この泥棒さん、警察の捜査から逃れる

ため遠く京都に隠れ住んで居たとの事ですが、最近になって会津坂下町在住の唯一の親戚であるいとこに連絡を取ろうとした際、いとこが死亡していた事を知り墓参りをする為帰省、墓前で自分の犯行を悔い自首したとあります。この事件、別のスポーツ紙の見出しでは「神に導かれ？教会の現金盗んだ男が自首」。実は、盗みをはたらいた先が会津若松市内の教会だったのだそうです。そこで、前述のような見出しとなったものです。ここで、考えたいのが、何が男をそうさせたのかと言う事です。自首への改心は、一方が「墓参り」と言う事で仏様を媒（なかたち）にした懺悔（さんげ）、そして「神に導かれ」とくれば神様の思召しと言う事でしょう。いずれにしても、目には見えないけれども何らかの大きな力により導かれた心がそうさせたと言えそうです。観音経の中に、「念彼観音力（ねんぴかんのりき）」とあります。「高い山から突き落とされても、火の中に落とされても、荒海で遭難しそうになっても、観音様の名を称えれば救われる」という意味です。ところで、この観音経の読み方には事釈と理釈があります。書いてあることを額面通り事実と受け取るのが、事釈。火の中や荒海を人生の苦しみ悲しみ、艱難辛苦と理知的に考えるのが理釈です。泥棒さんのお話に戻りますが、神様の元に盗みに入るのですからよほどの事情あつてのことだと思いません。そうなる前におそらくは曲がった事釈で神頼み、「神も仏もあつたものか」と恨みもしたものでしょう。その結果の現実が目の前の「盗み」という行為に走らせたの

かもしれません。ただ、改心させたのも同じ神仏、この時理釈として、仏様を拜むと言うことは、愚痴る事でも願ひ事をする事でもない、実は自分を拜む事なんだと気付いたのだらうと思います。自首した泥棒さん、今頃は、本当の意味で仏様や神様に救われるとはどういうことなのか、懺悔の中でかみしめているのかもしれません。

### ひとこと 「枯れ木に花を」



お釈迦様のお誕生日  
四月八日を、正式には釈  
尊降誕会（こうたんえ）  
と言います。兜率天（と  
そつてん）という天界に

おられた仏さまが、悩める一切の人々を救うために下界に下りて来られたことを降誕というところから名付けられたようです。ところでこの日は生まれたばかりのお釈迦様の像に甘茶をかける行事を致しますが、赤ちゃんお釈迦様は、右手を上左手を下を指してすくと立っておりす。小さな子供さんに何をしているように見えるか質問をすると、「横断歩道を渡っているところ！」という可愛い答えが返ってくることも多いようです。所謂「エライ職業」と過去に言われた職につく方が世間を賑わせている昨今を考えると、正しい信号を示すのもお釈迦様、そしてその横断歩道を自ら歩み、術を示すしかないようです。やはり子供の目は純真無垢、曇りがありません。また、その生まれたお姿と共に伝えられるお言葉に「天上天下唯我独尊」がありますが、この言葉に関して古いインドのお話

にこのようにあります。ある国にきわめて仲の良い若い王様夫婦がおられた。ある日の夕刻、西に沈む夕日に照らされた平和な領土を眺めながらの会話です。「妃よ、この広い世の中で御身以上に愛おしいものはあるか」妃はうなだれて「申し訳ありませんが、私以上に愛おしいものはありません、王よあなたは？」「やはり私も私以上に愛おしいものはない」お互いに意見は一致してはいるが、普段聞いているお釈迦様の教えとは違っているように感じます。そこでお釈迦様へ事の顛末をお話しすると、にこやかに微笑みながら「その通りだよ」と仰います。しかし、王の不安は消えませんが「でも自分が一番可愛くて、人のために尽くさないのは教えに違いますが」答えていわく「どの人も皆自分が愛おしい、愛おしいと思うからそれを傷つけてはいけないことに気付く、自分への愛おしさが判つてはじめて人のために尽くせるのだ、我が身への愛おしさを忘れて人のために尽くそうと思えばそれはすべて嘘になる」唯我独尊とは、決して利己的な意味として捉える事ではなく、自分可愛さから気付く他人への思いやりという意味なのでした。さてこの降誕会、別名「花まつり」とも言いますが、名前の由来は「枯れ木に花を」のフレーズで有名な「花咲か爺さん物語り」からとつたという説があります。春の暖かな日差しや恵みの雨で花々は開花をもよおします。教えの風やご縁の雨あればこそ心の開花宣言、「枯れ木に花を咲かせましょう」。